

Title	Thirteen Ways of Looking at a Victorian Woman: Representation of Sexuality in Thomas Hardy's Last Three Novels and Balladic Poems(Abstract_要旨)
Author(s)	Tamai(Nagamori), Akemi
Citation	Kyoto University (京都大学)
Issue Date	2019-11-25
URL	https://doi.org/10.14989/doctor.k22131
Right	学位規則第9条第2項により要約公開
Type	Thesis or Dissertation
Textversion	none

京都大学	博士（人間・環境学）	氏名	永盛明美
論文題目	Thirteen Ways of Looking at a Victorian Woman: Representation of Sexuality in Thomas Hardy's Last Three Novels and Balladic Poems (ヴィクトリア朝女性の13の見方：トマス・ハーディの最後期3小説とバラッド詩における性の表象)		
(論文内容の要旨)			
<p>本論文は、トマス・ハーディ(Thomas Hardy,1840-1928)の小説家時代最後期の三作品と、ハーディ研究において焦点が当てられることの少ないバラッド（物語詩）作品を取り上げ、小説家・詩人ハーディの女性表象と創作観を読み解く、ジャンルの違いを超えた横断的研究である。本文は序章に続き七章からなる。</p> <p>序章では、当時のマナー・ブックやダーウィンの『種の起源』(<i>The Origin of Species</i>, 1859)に端を発する諸分野で展開された性差別的言説を参照することで、本論文の前提となるヴィクトリア朝の女性たちに課された性のイデオロギー、道徳観を確認し、続いて現在までのハーディ研究の主要な批評の流れをその手法とともに概観する。1890年、ハーディは、女性のセクシュアリティを否定するヴィクトリア朝の体面 (respectability) や体面の過度な重視の風潮 (Grundism) に対抗して、エッセイ「英国小説に率直さを」 (“Candour in English Fiction”)を出してフィクションの存在意義を説いた。本論文が扱うのはこのエッセイ以降の小説である。</p> <p>第1章では、小説『ダーバヴィル家のテス』(<i>Tess of the d'Urbervilles</i>, 1891)を取り上げ、副題で “pure”と形容されるヒロインの “purity” の描かれ方に分析を加える。常に男性たちの対象として運命に翻弄されるテスは、最後まで受動的な存在である。また、男性たちによって神聖化され、精神面での “purity”のみを強調されたテスが処刑によって肉体を放棄させられるという物語の結末は、この作品の時点では、ヴィクトリア朝に支配的であった肉体的 “purity”を重視する価値観から男性作家であるハーディも自由でなかったという限界を指摘する。</p> <p>第2章では、小説『日陰者ジュード』(<i>Jude the Obscure</i>, 1895)において対照される二人の人物スーとアラベラのヴィクトリア朝社会構造内での法律、倫理観への適応と反発の観点から、二人の人物造形を再考している。従来の研究ではスーの分析に重点が置かれ、アラベラは「肉(欲)」の化身という見方がなされてきたが、ハーディは、アラベラを理想主義者のスーと対置し、その強力なセクシュアリティの背後にある法律への理解をもって、したたかに社会体制を利用する現実主義者として提示していることを論じる。</p> <p>第3章ではまず、ハーディが小説『恋の霊』(<i>The Well-Beloved</i>, 1897)の舞台をスリンガーズ島という架空の島とし、リアリズム小説と一線を画す構造をとることで、『テス』や『ジュード』といった作品がヴィクトリア朝社会から受けた糾弾をこの作品が被ることから守った、と指摘する。加えて、スリンガーズ島の婚前交渉の慣習を中心として浮き彫りとなる、ヴィクトリア朝的倫理観を反映したアヴィス家の三世代三様の女性像の展開に言及し、結末での主人公ジョスリンの美的感性の喪失とマーシアとの「慣習の実</p>			

践」が、芸術家が夢想的追及をやめ、現実世界の事象に目を向けることができるようになった示唆であり、ハーディ自身の一つの到達点でもあることを示す。

第4章は、小説から詩に活動の主軸を移したハーディ晩年の表現者としてのあり方を、短編小説「妻への想い」(“To Please His Wife”, 1891)とバラッド詩「船乗りの母」(“The Sailor’s Mother”)という「船乗りの帰還」をテーマとした両作品の関連性から考察している。妻フローレンス・エミリー・ハーディの手記を参照することにより、ハーディの育ったドーセットの地域性や幼少期の環境から育まれたハーディのバラッドへの親和性の高さが、「船乗りの帰還」というバラッド的主題を詩の形式で再生産したことの要因の一つとなったと論じる。さらに、ハーディ自身の手記を参照し、執筆活動初期段階より念頭に置かれていたハーディの創作観、すなわち文学作品は「観察者」の想像力によって構成されたフィルターを通して「より深い現実」(“the deeper reality”)を映じるという点で、両作品が形式の違いを超えて共通することを明らかにする。

第5章では、バラッド詩「フェニックス・インでのダンス」(“The Dance at the Phoenix”)におけるヒロインの抑圧された女性性が、ダンスや音楽の効果によって一夜限りで解放され、その生き様がフェニックス神話の転用であることを指摘する。ダンス、音楽、不死鳥といったモチーフを、バラッドとして構成することにより、ハーディが、当時の道德規範を逸脱しながらも、夫にとって“pure”で“just”な妻でありたいと願う女性のペーソスを描き出し、寛容な見方を示している、とする。

第6章では、詩「緞子の靴」(“The Satin Shoes”)と「刻み込まれた文字」(“The Inscription”)における狂女を取り上げる。緞子の靴と真鍮の墓碑銘板は、女性たちを精神的にも肉体的にも束縛し、狂気へと至らしめる装置である。また、19世紀英国女性作家の文学的想像力を論じた古典的評論『屋根裏の狂女』(Gilbert and Gubar, *The Madwoman in the Attic*, 1979)を援用して、ハーディがそれらの象徴的イメージを用い、抑圧された精神の投影としてヒロインたちを狂女として描きだしている、と指摘する。

第7章では、バラッド詩「私の会った女」(“The Woman I Met”)と「教会のオルガン奏者」(“The Chapel-Organist”)において提示される二人の売春婦の亡霊に焦点を当てる。二人の亡霊は、ヴィクトリア朝社会の「街の女」としての実像を反映したもので、社会的弱者の象徴であるマグダラのマリア的表象がなされている。ヴィクトリア朝時代の性観念にひそむダブル・スタンダードの狭間で、男性たちに肉体を提供することで対価を得、生きながらえる女性たちの「声」は、詩人ハーディが小説執筆をやめてもなお、ヴィクトリア朝の家父長社会で苦しみ、もがき続ける女性たちを見つめ、当時の社会制度と道德観を糾弾し続けていたことを示すものである、と論じる。

ハーディは、小説執筆をやめてからも、バラッド(あるいはバラッドを意識した詩作品)において、外的、内的要因により抑圧され、束縛され、また搾取される環境にあった女性たちを当時の時代背景を組み込みながら詩的手法を用いて描き出している。現在も主としてその小説が研究されるハーディであるが、「より深い現実」を直視することにより、抑圧的な環境におかれたヴィクトリア朝女性たちを観察し、小説においても詩においても描き続けた、と本論は結論づけている。

(論文審査の結果の要旨)

英国の19世紀は、小説の傑作が多く生み出された時期であった。その末期の小説家トマス・ハーディ(Thomas Hardy 1840-1928) は長いヴィクトリア朝から20世紀への移行期にあって、多くの優れた小説を残しモダニズムへの橋渡しをした。その小説作品の多くは映画化され、既にさまざまな観点からの研究が進んでいるが、ハーディのもう一つの顔である詩人としての研究はいまだ十分とはいえない。ハーディは19世紀末で小説執筆をやめて、以前から行ってきた詩作に専念するようになる。本論文はハーディの最後期の小説三篇と七篇の物語詩をテキストに密着しつつ考察し、その結果、ハーディが小説においても詩においても、ヴィクトリア朝期英国の「より深い現実」を直視しつつ、抑圧的な環境下の女性たちを描いていることを明らかにしたものである。

本論文の意義は次の三点にまとめることができる。

第一の意義は、ハーディが現実をどのような眼差しで見ているのか、また現実をどのように描き出しているのか、という問いを通じて、本論文がハーディの限界を見定めていることである。ハーディ研究において当の作家を批判的に論じることはいまだに勇気のいる仕事であるが、申請者は小説『ダーバヴィル家のテス』(*Tess of the D'Urbervilles*, 1891) を扱った第1章でこの作品の書き手ハーディもまた、ヒロインに対するヴィクトリア朝英国の男性に特有の眼差しを脱していないことを提示して、この時期のハーディの限界を指摘し、この限界があとの時期に書かれた作品で超えられるという結論につなげている。

第二の意義は、本論文が従来の研究が等閑視してきた作品や作中人物に光をあて、それらのハーディ文学における意義を示したことである。たとえば、第2章で取り上げられる『日陰者ジュード』(*Jude the Obscure*, 1895) のアラベラという脇役の女性は、従来は単なる肉欲の権化として片付けられてきたが、本論文では、理想主義者であるヒロインと対置された現実主義者として、ヒロインを相対化するものであるとの卓見が示されている。また第3章では、従来の研究では軽い読み物として真剣に取り上げられることのなかった『恋の霊』(*The Well-Beloved*, 1897) を取り上げ、ハーディが小説執筆の最後に、芸術家を主人公に据えたメタ的な作品を書いて、現実世界の事象に目を向けるという作家としての決意をこめたことを指摘している。

第三の意義は、本論文がハーディの小説研究と詩研究を有機的に結びつけている点である。ハーディという英文学史上の巨大な存在に関して、先行研究の膨大な蓄積の前に研究者は何ができるのか、が常に問われる。従来ハーディ研究の多くはその小説作品を対象としており、数少ない詩の研究をとっても、「運命論者」というハーディに貼り付けられたレッテルに沿うような作品以外に研究が及ぶことが少なかった。本論文は、第4章以降でこれまで見過ごされがちであったバラッド作品を取りあげることによって、新たな見方を提出している。バラッドは、英国の中世以来広く社

会に浸透していた物語詩であり、しばしばメロディに合わせて歌われる。ハーディは幼少期より英国南部でバラッドを始めとする共同体の音楽を聴いて育ち、その作品には土地に根ざした物語性が反映しているにもかかわらず、従来のハーディ研究においてバラッドが重要な課題とされてきたとは言いがたい。バラッドはその物語性のゆえに小説との親和性が高く、これに注目した申請者の着眼点は評価に値する。本論文は後半で、テーマを共有する小説作品とバラッド作品を横断的に論じることでハーディ研究の空隙を埋めている。

もっとも、本論文には不満な点がないわけではない。本論文の関心の中心は表現者・創作者としてのハーディであるが、作中人物が理想化されずリアリスティックに描写されているかどうか、と、ハーディが現実を描けているか、との区別が明瞭になされていない箇所がある。また、作品の背景をなすヴィクトリア朝は長期にわたり、その社会的要素（新興階級の形成、産業革命、鉄道建設、「新しい女」現象、宗教、ヴィクトリア朝道徳など）は時の流れの中で変化するものである。ハーディはその末期の作家であるが、本論文では「ヴィクトリア朝」を固定的にとらえる傾向が見られる。これらは申請者のセクシュアリティに関する思い入れの強さが、議論を単純化する傾向を生んだ結果と考えられるが、これらの弱点は上に述べた本論文の意義を減ずるものではない。本論文で示された小説と詩を横断的に扱う手法は、今後さらにハーディの他の小説、詩作品にも応用されることが期待される。

よって本論文は分野横断的な研究として、博士（人間・環境学）の学位論文として価値あるものと認める。また、令和元年7月31日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。

なお、本論文は、京都大学学位規程第14条第2項に該当するものと判断し、公表に際しては、出版刊行上の支障がなくなるまでの間、当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。

要旨公表可能日：令和 年 月 日以降